

中国電影大觀



見知らぬ女からの手紙(一个陌生女人的来信/ LETTER FROM AN UNKNOWN WOMAN)

2007(平成19)年11月4日鑑賞(そごう劇場)



監督・製作・脚本＝^{シュー・ジンレイ}徐静蕾／出演＝^{シュー・ジンレイ}徐静蕾／^{オマン・ウエン}姜文／^{リウ・イエ}林園／^{オワン・ジュエ}黄覺 (ナインエンタテインメント、アミューズソフトエンタテインメント配給／2004年中国映画／90分)

……何とも意味シンなタイトルだが、テーマは無償の愛、一途の愛。学生時代の^{シュー・ジンレイ}徐静蕾がホレ込んだ素材だけに、主演のみならず、監督・脚本・プロデュースと大車輪の活躍はお見事！ ^{チャン・ツイイー}章子怡、^{ヴィッキー・チャオ}趙薇、^{ジョウ・シュン}周迅と並ぶ中国四大女優の1人だが、彼女の才能だけが一歩抜きん出た感が！ もっとも、現実派の私としては、ホントにこんな女っているの？ と思わないでもないが、それはそれ、映画は映画……。

^{シュー・ジンレイ}徐静蕾の才能は脚本家としても

映画は脚本が命。そう考えれば、^{シュー・ジンレイ}徐静蕾の才能はすごい。1948年にマックス・オフルス監督、ジョン・フォンティーン主演でハリウッドで映画化された、恋愛映画として評判の高い『LETTER FROM AN UNKNOWN WOMAN』(邦題は『忘れじの面影』)は、オーストリア生まれのユダヤ系作家シュテファン・ツヴァイクが1922年に発表した短編小説『未知の女の手紙』を映画化したものとのこと。

1974年生まれ^{シュー・ジンレイ}の徐静蕾がいつこの映画を観たのかは知るよしもないが、この小説を読んだのは学生時代らしい。そして、その時彼女は、この原作の映画化を心に誓ったとのこと。そんな学生時代の夢を実現したのが、監督・脚本・製作・主演した第1作『私とパパ』(02年)に続いて、監督・脚本・製作・主演をこなした第2作であるこの『見知らぬ女からの手紙』。

ネット情報によれば、2004年の東京国際映画祭にこの映画が出品された際、横浜アリーナで彼女は「第1作の『私とパパ』ではなく、『見知らぬ女からの手紙』を私

のデビュー作と呼びたい」と語ったとのこと。それほど彼女の思い入れの深い作品がこの『見知らぬ女からの手紙』。徐 静 蕾^{シュー・ジンレイ}の才能は女優として、監督としてはもちろんだが、脚本家としてもすごいもの。なぜなら、20世紀初頭のウィーンを舞台としたシュテファン・ツヴァイクの1922年の短編小説を脚本家徐 静 蕾^{シュー・ジンレイ}は、冒頭のイントロダクションを1948年のあるシーンからスタートさせたうえ、本筋のストーリーは1930年の北京からスタートさせた。そして感心するのは、今ドキハリウッド映画も邦画も原作ベッタリの映画が多い中、よくぞここまですばらしい脚本を書いたものだという。天が徐 静 蕾^{シュー・ジンレイ}に、女優、監督、プロデューサーの他、脚本家という4つ目の才能を与えたことにビックリするとともに、中国映画ファンの1人として謝辞！

こんなナレーションなら

この映画は徐 静 蕾^{シュー・ジンレイ}主演だが、イントロダクションが終わるまでの間しばらくスクリーン上では、徐 静 蕾^{シュー・ジンレイ}によく似た女の子林 園^{リウ・イエ}が少女時代を演じるから、徐 静 蕾^{シュー・ジンレイ}の出番はなく、彼女のナレーションが流れてくるだけ。

しかしイントロダクションでは、見知らぬ女（徐 静 蕾^{シュー・ジンレイ}）から中年の小説家（姜 文^{チアン・ウェン}）に送られてきた手紙を読みあげる徐 静 蕾^{シュー・ジンレイ}のナレーションが心に重く響いてくる。そこには、「私が望んでいることはただ1つ。ここに書いてあることがすべて真実だということを信じてもらいたい」と書いてあったが、そこに書かれていた内容は、男にとっては実に衝撃的なもの……。

私は映画の中でナレーションを多用するのはあまり感心しないと考えているが、この映画に関しては別。黙って手紙を見つめる姜 文^{チアン・ウェン}の静かな演技と相まって、徐 静 蕾^{シュー・ジンレイ}のナレーションのうまさがまずこの映画の緊張感を高めていくことに……。

さて、現実とは……？ 女の場合

見知らぬ女からの手紙は、「最愛の息子の命が奪われた今、自分も生きていくことができなくなったことを告げるにあたって、これほど一途にあなたを愛した女がいたことを知ってほしかった」というもの。もっとも、その結論に至るまでにはいろいろなことが書かれているから、この手紙を読み始めた男は一瞬ギョっとしたはず。すなわち、この女は一体ダレなのか……？ 何時つき合っていた女なのか……？ ひょっとしてA子？ それともB子……？ 頭の中は過去のさまざまな女関係の記憶が走り

めぐったはず……。また、それと同時に、この女はなぜ今こんな手紙を……。そして、その狙いは一体ナニ、と考えたはず……。もちろん、それは女だってわかっているから、きちんとその予防線を張っており、結論として、彼女が何も求める気はないことは十分納得できる文面になっている。

しかし現実問題として、こんなに1人の男を黙って愛し、そして黙って去っていくという女がいるのだろうか……。したがって、ストーリーとしては実によくできているが、現実問題としてはホントにこんな女がいるの……。つい男の私はそう思ってしまったが……。

さて、現実は……。男の場合

記者、小説家のその男は知的で情熱的そしてダンディだから、たしかに魅力的。したがって、彼の周りにいつも女がいたのは当然のこと。しかし、いくらプレイボーイであっても、男は自分がモノにした女は覚えているもの……。しかもこの男は、女をたらし込むことが目当ての単なるプレイボーイではなく、真剣に女と向き合ってきたことは、彼のさまざまな対応から明らか。そもそも彼が、反日デモに参加している彼女と視線を合わせ、デモ鎮圧の混乱から彼女を救い出したのは、一体なぜ……。また、その後の政治問題を含む真剣で楽しそうな話し合いを見れば、単なる一夜のセックス目的でのお誘いでないことは明らか。

さらに、連日のように逢瀬を続けていた2人は、決して別れたのではなかったはず。すなわち、彼が北京から張家口へ旅立ったのは、日本の勢力が侵攻を強めてくる今、どうしても北京から華北へ行かなければならないという記者としての使命感からだった。したがって、彼が北京を離れたのは一時的な仕事の都合によるもの。すると、後述のように、「戻ったら連絡する」という言葉を残して彼女の元を去っていった彼は、なぜ戻ったのに連絡しなかったの……。さらに、それから8年後、今は高級娼婦に姿を変えて、パトロン(?)の大尉と共に連日ナイトクラブに現れている女が、あの大学生の彼女であると識別できなかったのはなぜ……。あの時の男の、あの女に対する気持は、そんなに薄っぺらなものだったの……。それが私には不可解。したがって、この点についてもストーリーとしてはよくできているが、現実問題としては、とつい思ってしまったが……。

🎬「戻ったら連絡する」というセリフをどう考える……？

この映画には「戻ったら連絡する」という男のセリフが、1度ならず2度も登場する。そして、2度ともそれがカラ手形になってしまうところがミソ……？

デジャヴ（＝既視感）とは面白い現象。それが科学的にどこまで解明されているのかよく知らないが、それをタイトルにした面白いハリウッド映画が、デンゼル・ワシントン主演の『デジャヴ』（06年）だった。また、私の大好きな ZARD の初期の楽曲『眠れない夜を抱いて』の歌詞は、「ざわめく都会（まち）の景色が止まる あの日見たデ・ジャ・ヴと重なる影 もしもあの時出逢わなければ 傷つけ合うことを知らなかった いじわるに言葉はすれ違うけど 愛を求めている」というもの。

シュー・ジンレイ
徐 静 蕾監督兼脚本家は、この「デジャヴ」を男のセリフの中にとり入れることによって、男があのかの時のことを思い出すのかどうか微妙なところまで来ていることを表現させている。自分の部屋まで入ってきたある女性と一夜を共にし、翌朝一緒に朝食をとり、彼女は部屋を出て行く。今日もそれと同じパターンをくり返しているが、それはあのかの時のあのかの女性との状況、そしてあのかの時のセリフとほとんど同じ。これこそがデジャヴ（既視感）だが、その相手の女性は一切誰だったのか……？

そんなデジャヴの体験をもつ男であれば、「戻ったら連絡する」というセリフを女に語る時、あのかの時も全く同じセリフを同じ女に語ったナと思い出してもよさそうなの……？ しかもスクリーン上で見る限り、男は誠実そうなタイプだから、彼はなぜそのセリフどおり、戻ったのに連絡しなかったのか……？

まあ、そういう自己矛盾する部分があるから男は面白いし、映画のストーリーも成り立つわけだが……？

🎬ポイントとなる小道具は……？

フランス人は男女を問わず花の使い方がうまい。したがって、フランスの恋愛モノ映画には、よく花を使ったおしゃれなシーンが登場する。中国人にフランス人と共通するそんな資質が高いとは決して思えないが、私は常々中国語の発音とイントネーションはフランス語のそれに似ていると感じている。したがって、中国語で愛の言葉をささやきながら一輪の花を男から女に捧げるというシーンは意外とおシャレ……？

シュー・ジンレイ
そんな目でみると、この映画で徐 静 蕾がこだわった小道具が白いバラ……？ こ

れは、男と女の恋が順調に進んでいる時は、一輪の白いバラを髪の毛にさすという行為として表われ、逆に離れ離れになっている時は、誰からか誕生日に届けられてくる白いバラの花束として登場する。あまり細かいことを紹介してしまうと興ざめになってしまうので、これ以上は書かないが、そんなポイントもお見逃しなく……。

執事の目は……？

男の傍にはいつも1人の執事（黄^{ホワン}・覚^{ジュエ}）がいた。映画の冒頭、「見知らぬ女からの手紙」を男に手渡したのがこの執事なら、場面が一変して若き日の男の傍にこの執事。

ここでこの映画の時代の流れを整理しておこう。映画冒頭のシーンは1948年の真冬の北京。つまり、日本を追ひ払った後、国共内戦でようやく共産党が勝利しようとしている時期だ。

冒頭のシーンが終わると時代は一転、1930年の北京に移る。男は第一線でバリバリ働いていた若かりし頃で、女は少女時代。こんな10歳か11歳の少女がある瞬間、男と恋に落ち、以降死ぬまで一途にこの男だけを愛することになるのだからすごい。

その6年後、女は北京の女子師範大学に入学し、1937年には多くの学生たちと共に抗日デモに参加。そこで男と再会して少女時代からの「思い」を遂げることに……。しかしそんな甘い生活は3カ月しか続かず、どうしても華北へ行かなければならないという男と別れることになるのだが、それが一時的か半永久的かが大問題……。その時の時代状況は最悪。すなわち、侵攻を強めてくる日本軍によって北京にも戦火が広がったため、やむなく女は北京を離れるが、その苦難の旅の中で生み落としたのが彼の息子だ。

さらに、それから8年後。つまり、日本を中国大陆から駆逐した1945年後半～46年頃だが、女手ひとつで息子を育てている彼女は、息子に彼と同じレベルの生活をさせるため、美しく洗練された姿で男たちの間を渡り歩いていた。そして、毎夜出入りしている華やいだダンスホールで再びめぐり合ったのが、あの男。2人は当然のようにベッドに入り、愛し合うようになるのだが……。

以上、年代を追って詳しく2人の恋模様(?)を紹介したが、この間ずっと男に仕えていた執事の目には、ひょっとして主人以上にいろいろなことの本質が見えていたかもしれない。執事は、当然少女時代と学生時代の彼女を見てきたし、高級娼婦とな

っている姿も見ているはず。もちろん執事がご主人のプライバシーに口出しすることはないだろうが、ひょっとしてこの執事は、ご主人が気づいていなかったこの女が誰かについて、はっきりと気づいていたのでは……？ そんな興味をもって、是非この執事に注目してもらいたいものだ。

私のカメラ術は……？

私は特に映像を勉強しているわけではなくズブの素人だが、カメラ撮影については少し勉強すれば、少なくとも①構図のとり方と②明るさの調整の2点についてはこだわりが出てくるもの。構図のとり方は、ズーム機能を使い、縦横どちらにするかを含めていくらでも自由にセットできる。他方、明るさのテーマは、内蔵のフラッシュと別売りのストロボをどう使いこなすかということ。そこで大切なことは、被写体をどこまで明るいところに置かかということと、周辺の明るさとの比較検討。つまり、深夜のまちで、煌々とネオンが輝いている前に人間を立たせてシャッターを押すと、背後のネオンの明るさだけが強調され、人間の顔は真っ暗に写ってしまうことになる。こんな場合は、人間の顔をフラッシュが到達する距離まで近づけたうえ、その部分だけにフラッシュを集中すればオーケー。

カメラワークと色彩へのこだわりに注目

こんな風にカメラワークを少しでも勉強していると、この映画で徐 静 蕾^{シュー・ジンレイ}監督がいかにカメラワークと色彩にこだわっているかがよくわかる。もちろん、撮影や美術は監督の采配だけではなく、それ専用のスタッフがいるから、彼らの能力に負うところが大きいのは当然。しかして、『見知らぬ女からの手紙』の撮影は、『恋恋風塵』(87年)、『戲夢人生』(93年)、『珈琲時光』(03年)などの侯 孝 賢^{ホウ・シャオシエン}監督作品や、『花樣年華』(00年)などを手がけた台湾の名カメラマン、李屏賓^{リー・ピンビン}が、また美術は、『活きる』(94年)、『初恋のきた道』(00年)、『北京ヴァイオリン』(02年)の曹 久 平^{ツァオ・ジューピン}が担当したというからすごい。

スクリーン全体のトーンは暗いが、それは1930年の北京から始まる時代状況を考えれば当然のこと。そして、そんな時代状況の中でのカメラワークと色彩美はお見事。そしてまた、映画後半の日中戦争終了後のナイトクラブの明るさや華やかさ、そして美しく着飾った徐 静 蕾^{シュー・ジンレイ}の美しさとの対比もお見事。たちまちこの映画のファンとな

ってしまった私としては、あなたにも是非そんな点を味わってもらいたいものだ。

シュー・ジンレイ 徐 静 蕾の更なる「大化け」を期待！

チャン・ツイイー 章 子 怡、ヴィッキー・チャオ 趙 薇、ジョウ・シェン 周 迅と共に、中国四大女優の一人がシュー・ジンレイ 徐 静 蕾。多分日本ではチャン・ツイイー 章 子 怡の人气が1番だが、中国ではシュー・ジンレイ 徐 静 蕾の人气が断トツで、彼女のブログは最もよく読まれているらしい。去る10月10日に北京電影学院で特別講義をした時、私は俳優棟の中に貼られている写真で学院時代の彼女の姿を見たが、多分学生時代から他と違う輝くものをもっていたのだろう。

シュー・ジンレイ 徐 静 蕾は1974年生まれだからまだ33歳。女優として最も良き時代を迎えているのだから、いい監督、いい作品とめぐり合って女優としても大活躍してもらいたいし、監督としてもこれだけの才能を天下に示したのだから、1、2年に1度は監督としての才能も発揮してほしいもの。監督として、また脚本家としての才能によって既に他の3人の女優から1歩抜きん出た感があるが、私としては、シュー・ジンレイ 徐 静 蕾の更なる「大化け」を期待したい。

2007(平成19)年11月9日記